

vol.49

小説の雑食性について

文 島田 雅彦

text by Masahiko Shimada

ある調査で、私の母校の東京外国語大学が最もコスバが低い大学認定されてしまった。在学中は手間暇のかかる外国語学習をみっちりやらされるが、社会に出てから専攻の言語を使う機会はほとんどなく、他大学の卒業生に較べると、生涯賃金も低いからなのだとか。私の専攻はロシア語で、習得にかなりの労力を使ったが、今までそれを使う機会もほとんどなかった。ただ、ソ連邦崩壊後の経済危機で、多くのロシア美人が出稼ぎに日本に来ていた頃、ロシアン・クラブでロシア語を話し、モテたことがあり、それが唯一の例外か。コスバ、生産性、効率性を最優先する新自由主義なるカルトは、条件つき優等生ばかりを大量生産してきたが、幸い、私は低コスバ大学出身の恩恵で、コスパ重視システムに過剰適応せずに済み、コスパは悪くて満足度の高い自由業を謳歌してきた。誰しもコスパ重視のシステムから離脱する時が来るのだから、最初からその準備をしていれば、何も怖いものはない。

同様に「売れない作家」というレッテルも自分に向けられている気がしないでもないが、映画化されてベストセラーになるような商業的成功を目指すなら、あまり批評性を介入させず、広く共有されるようなウエルメイドな物語にしておくのがよい。ただ、売れる作品とは「消費されやすい」、「すぐ飽きられる」というデメリットと背中合わせだ。しかし、果敢にイノベーションを行い、容易には消費し尽くされない商品を生み出す運動性こそが資本主義の特徴とわかっていい。その意味では新しい手法やジャンルを開発するといった文学的イノベーションを一番熱心にやっているのは純文学である。

もともと小説というジャンル自体、雑食性のもので、中世騎士道物語のようなパターンを踏襲するだけのロマンスを逸脱し、過剰な批評性を導入しつつ、さらには百科全書とか風刺とか告白といった他のジャンルを包摂しながら、発展してきた。その雑食性もまた資本主義的なのである。もっと大胆なことをいえば、現世で売れるより来世で売れることを目指せばいいという話だ。これはベストセラー作家に対する負け惜しみに聞こえるかもしれないが、そこにこそ「売れない作家」の矜持はある。

Profile

1961年東京生まれ。1984年東京外国語大学ロシア語学科卒。在学中の1983年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。主な作品に『自由死刑』、『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）、『悪貨』、『虚人の星』（毎日出版文化賞）、『君が異端だった頃』（読売文学賞）ほか多数。『忠臣蔵』、『Jr. バタフライ』のオペラ台本もある。芥川賞選考委員。法政大学国際文化学部教授